
高齢者に対する癒しの環境

Healing Environment for the Elderly

日本医科大学 医療管理学教室 助教授

高柳 和江*

はじめに

母は、日本で原因不明の足の痛みで入院して、痛みは治ったものの諸検査でたった3ヶ月で1日20時間の寝たきりになった。娘の顔もわからなくなった母を私は当時小児外科医として働いていたクウェートに引き取った。持参薬を全部捨て、尊厳を高めるように人間的に遇し、リハビリをし、良質タンパク質である食事をともにした。母は1ヶ月で元に戻りプールで泳げるようになった。日本の医療が患者を臨床的貧困に陥らせていることに気付いた。帰国し、人間が小さくなって病気に負けて死んでいくのではなく、堂々と生きていけるようにと日本の医療を変えようと「癒しの環境研究会」を10年前に設立した。

1. ストレスの対処

学生10人にICUに3泊4日入院させた。感情プロフィールテストで、怒り・敵意と活気がなくなり、緊張と鬱と疲労が高まって混乱した ($p<0.05$)。病気があって、ICUという状態におかれた場合に、自己治癒力は出てこないと考えられた。

人間はストレスに対して二つの対処反応をする。ひとつは、ストレスに前向きに対処するキャノン説の「闘争と逃走」だ。もうひとつはセリエの「降伏と忍従」説だ。病気の重圧に負ける、ADLが下がり、入院していたいという臨床的貧困になる。相談相手がおらず、健康障害を前向きにとらえられないときに鬱になる。高齢者の場合は程度がひどい。

少なくとも一歩入っただけで病気が治る気持ちになる環境、いればいるほど元気になる気がして、自己治癒力が高まり、エンパワメントするような環境が必要だ。これを、癒しの環境といい、高齢者においても、施設でも家でも必要だ。

2. 人間の権利と情報提供

ニュージーランドの「医療と障害のサービスに関する障害者の権利」には、「あなたの不平を重大事項として受け取ってもらうこと」というのがある。「アルツハイマー患者の権利」は、全ての情報提供を受ける権利、大人として扱われ、子供扱いされない、表現した感情は真剣に受け止められる、抱きしめてもらう、なでてもらう、握手をしてもらうなどの権利だ。米国のレーガン大統領はアルツハイマーになり、手紙を書いた。「私はアルツハイマー病になりました。原因が分からず、治療もなく、人格がだんだん荒廃してくる病気です。米国民よ。この病気の原因解明と治療のために、研究費を寄付してください」と。おかげで米国ではがん研究よりもアルツハイマー研究のほうに研究費が回されるようになった。これもひとえにレーガン大統領に情報提供を十分に、「アルツハイマー病ということ」を伝えたからだ。日本でアルツハイマー病という情報提供を本人にしていなかったというのはとてもおかしいことだ。

おむつは人間の尊厳にもとる。情報がなく、日本人は頑固な便秘に浣腸、摘便という尊厳をなくす手法とっていた。私は、盲腸ポート手術を米国

* 現) 東京医療保健大学 教授/癒しの環境研究会 世話人代表/笑医塾 塾長

から、日本の青梅市立総合病院などに導入した。盲腸に胃瘻を埋め込み浣腸液をいれると、順行性腸蠕動で頑固な便秘や失禁はなくなる。ただ診療報酬はつかず、自費である。この手術を受けた後で人生が変わったと言う人は多い。失禁の心配がなく外出できるのだ。この手術がひろまって100人を超えると、診療報酬がつくのではないかと思っている。でも、情報提供が未だに、ない。

日本の介護は高齢者の退行を助長しているようだ。高齢者施設リハビリでは広い部屋に全員集合させ、幼稚な歌を歌わせる。入居者の方に、リハビリまたはボランティアと称して、タオルのおしぼりたたみをさせている施設もある。作業として成果として認めていない。日本画家の小倉遊亀さんは、2年間の入院後、100歳で退院した。本人を人間的に扱う人であうまで、ケアワーカーは50人変わった。良いケアをうけたら、小倉遊亀さんは精神的に蘇り、100歳の時に比べ、101歳で卓越した絵画をかいだ。いつになっても成長する能力が人間にはあることを示した。103歳までに年間3点の絵を書き描きパリで個展を開いた。

孤独の種類には、いろんな因子がある。高齢者は孤独になりやすい。孤独になった時に、対人的な接触、社会的な接触、そして一人であることをしっかり受容して、ほかの生きがいを見つけ出すという風に誘導することが大切である。

ストレスにであったときに、ストレスバッファつまり、緩衝材があると良い。大自然や、時などが、いろいろな緩衝材があるが、一番いいのはソウルメイトだと私は思う。ソウルメイトとは本当に心の中を話し合える人のことで、結婚しなければいけないわけではない。今の高齢者施設では男女のソウルメイトができて、財産問題で、親族が引き離すことが多い。しかし、ソウルメイト同士と一緒に住み、一緒に生活を楽しめるというような環境を作ると、生き残ることができると思っている。

癒しの環境には、ソフトとハードがある。ソフトとして、安全・リラックス・元気になるの原則がある。米国の高齢者施設「エデン」では、鳥や猫と一緒に人間的に住んでいる。高齢者は、個室であるが日中はみんな廊下に出ている。ハートは高齢者のマークで、高齢者は明るく生きている。ニュージーランドでは、モチベーション・セラピストがいる。臨床的貧困で鬱になっている人をベッドからひっぱり出してきて、人間的に生きることの楽しさということを教える。

3. 癒しの環境のハードとして EBM

高齢者の施設は、高齢者の特性を知ってEBMで適切な色環境を考えるべきである。

森林研究所の宮崎先生の木の研究では、壁面全部合わせて30%が木であれば人間が一番安らぐ最適だという結果を出した。EBMで、人間的なデータがほしい。

最後に

患者は、病を持ったひとりの人間である。高齢者は、経験を重ねたひとりの人間である。医療介護というのは、医療側、福祉側だけでなく、人間の立場に相手を考えるべきだと思っている。人間は生まれてきたら死んで、腐葉土になって次の世代に受け継がれていく。人間が死ぬぎりぎりまで人間的に生きること、それをサポートするのが介護で、老年期痴呆研究会（現 老年期認知症研究会）の役目だと思う。

文献

- 1) 高柳和江：死に方のコツ 飛鳥新社
- 2) 高柳和江：癒しの国のアリス 医歯薬出版

この論文は、平成15年11月8日(土) 第15回北海道老年期痴呆研究会で発表された内容です。